
HolyLance War

IOTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H o l y L a n c e W a r

【Nコード】

N 8 8 6 1 E

【作者名】

I O T A

【あらすじ】

とある高等学校、一見そこは極々普通の県立高校だった。しかしそこには、毎年夏休みに突入する度に、密やかに執り行われる『戦争』があった。「Welcome to the Holy Lance War」

0 (前書き)

※注意

この小説には若干のグロテスクな表現が含まれています。苦手な方はご注意ください。

ちなみに、この作品は同著者の別作品『False War』とは一切関係ありません。重ねてご注意ください。

今は夏。そして今日は地元の夏祭り。仄暗い通路の中で、彼女はそれを思い出す。

壁、床、そして天井までも、全て灰色のレンガで舗装された、幅五メートルほどの広い通路。殺風景どころの話ではなく、恐怖を煽るほどに無表情な情景。湿気に満ち、肌に纏わりつくような寒気は季節を忘れさせ、電灯やランプなど、一切の照明がないはずなのに、なぜか薄暗いだけで延々と先が見えるその通路は、常識的な思考を奪う。

まるで、迷い道がない一直線の迷路だ、と彼女は思う。

そして、この迷路にはゴールがあるのだろうか、とも思う。

一体自分は何をしているのだろうか、友人からの夏祭りの誘いを断ってまで、なんでここに来たのか、一度しかない高校一年生の夏に、なんで私はこんな所に、こんなモノを持って歩いているのか。

彼女は一振りの剣を持っていた。細く長いサーベルである。柄のところには豪華な細工が施された金色のハンドガードが付いている。「世界を制する力なんて、私本当に欲しいのかな……」

彼女は歩を止め、サーベルを見詰めながら呟いた。すると、

『ミサキは欲しくないのですか？』

間髪要れずに、女性の透き通った声が通路に響く。しかし、この場には彼女一人しか居ない。

「わからないよ……。だって世界を制するって全然意味わかんないし。具体的にどうなるの？ サッチャン」

『具体的には、なんでもできます。世界を制するということは、世界を意のままにできるということと同義ですよ、ミサキ』

サツチャンと呼ばれたその声は、すぐに答える。そしてミサキと呼ばれた彼女は、サーベルを見詰めたまま話す。そこから導き出される結論は一つ、サーベルが喋っているのだ。

「なんでもって、それ要するに何でも願いを叶えてくれるってこと……？」

『そう受け取ってもらっても同義でしょう』

「お金持ちになりたいとか、イケメンの彼氏が欲しいとか、ギャルのパンティおーくれ……とか？」

『巨万の富や美形の恋人、女性用の下着ぐらいなら、造作もないことでしよう。しかし、ミサキは女性用の下着が欲しいのですか？』

ミサキの軽口に、とことん真面目に答えるサーベル。ミサキは呆れたように、それでいて可笑しそうに微笑する。

「なんか……ドラゴンボールのシェンロンみたいだね」

『私は俗世に疎いので、ドラゴンボールというものはわかりませんが、ミサキが言うならそうなのでしょう』

ミサキは俯きがちに鼻を鳴らしてから、再び歩き出す。

しばらくすると、サーベルが言った。

『幾つか訊いてもいいですか？』

「うん？」

『先ほどの会話から察するに、私はミサキが世界を制する力を欲していないように感じましたが、合っていますか？』

「うーん、まあそうだね。知らない、かなあ……」

『そうですか……。ならばなぜミサキはこの戦争に参加しているのですか？』

「……」

ミサキは応えない。サーベルは続ける。

『最初に説明した通り、これは戦争です。当然、危険を伴います。

勝者にのみ与えられる世界を制する力、ミサキはそれを欲していないのに、なぜここに居るのですか？ 生物が有する生存願望との間に矛盾が発生します。……参加の自由権はあるのですよ？ ここに

来なければいいだけの話なのですから』

ミサキは再びうーんと唸ってから、答える。

「うまく言えないけど、面白そうだって思ったからかな」

『面白そう、ですか……』

「うん、なんて言うかね、サッチャンに言ってもわからないかも知れないけどさ、私達の世界は退屈なんだよ」仄暗い通路の先を見通すような遠い目をしながら、ミサキは語る。「勉強して、大学に入学して、会社に就職して、結婚して、子供を生んで、育てて、死ぬ。それが決まりっていうか、私達の世界の常識なんだ」

『ミサキはその常識が嫌なのですか？』

「うん……それが悪いことだとは言わないよ。けどね、なんかそれって、とってもつまらなそうじゃない？」

『それがつまらないかどうかは、私にはわかりかねます』

「だろうね」とミサキは微笑する。「とにかくさ、今の私にはその常識の良さがわからないんだよ……。だからここに居るのかな。それに、ここにはサッチャンも居るしね」

サーベルは理解したのかどうなのか、しばらく沈黙してから、別の質問をミサキに振る。

『ところで、私をサッチャンと呼ぶのは何故ですか？』

「あはは、今更それ訊く？　サーベルだからサッチャン、可愛いでしょ？」

『……それが可愛いかどうかは、私にはわかりかねます』

と、ここで通路に変化が生じた。真っ直ぐ延びる通路の先には、灰の壁が見える。

「行き止まり……？」

ミサキは呟いて、焦ったように駆け出す。しかしそれは行き止まりではなかった。左と右の分かれ道、T字路だ。

いよいよ迷路然としてきたな、とミサキは思いながら、しばらく考え、右折を選んだ。

左右の分かれ道に出くわした場合、人は自然と左を選ぶ傾向にあ

る。それを知っていたミサキはその傾向に逆らったのだ。特に意味もなく、ただなんとなく逆らってしまった。

結果から言えば、その判断は間違いだった。もう二度と取り返しの付かない、この戦争に参加してから最初で最後の間違いだった。

「え？」

唐突に、音がした。

小さな音だった。カリと、何かが動くような、小さな機械が稼動するような音だ。

「あ、れ？」

ミサキは自分の顔の異常に気付く、頬が熱く、触れてみると、赤い、温かい、血だ。

頬には斬られたような、裂傷が、

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ

『ミサキ！ 私を使用して防壁の展開をツ——』

サーベルは叫んだ。“防壁”と。

だが、間に合わない。

微かな風切り音と共に高速で飛来する無数の何かは、紛れもない暴力となって、ミサキを襲う。

断末魔を叫ぶ猶予すら与えられない。

ミサキは自分の身に何が降りかかったのか、それを理解する前に、指が吹き飛び、頸動脈が千切れ、肺を貫かれ、心臓が破裂して、絶命した。

パタンと、まるでドミノのように果敢なく、ミサキは床に倒れ、ゆっくりと水を滴らすかのように、ミサキの血液が床に広がる。

その前方数十メートル、人が去っていくような足音だけが響いた。

静寂のみが支配する仄暗い通路。

『ミサキッ…………。ミサキ……言ったでしょう？　これは戦争なのですよ』

温もりが失われたミサキの手、そこに握られたサーベルは、

『この唐突で残酷な死を経験しても尚、あなたはこれを面白いと言えるのですか…………？』

もはや答える相手のいない問いを、口惜しそうに呟いてから、砂のように崩れ落ち、塵のように消えていった。

教壇の脇に立ち、厳かに熱弁を振るう数学教師の前田^{まえだ}。

その熱心さを尻目に、僕は机に頬杖を付き、ノートに落書きをして退屈を殺していた。

まず骨組みとして、頭に浮かんだシルエットを描写し、それに肉書きとして、細部を描き込んでいく。

ちよつとした自慢だが、僕は絵が上手いほうだ。うん、我ながら上手く描けた。

F Nモデル・F N P 9 Mピストル。

オートマチックピストルの中では僕が一番好きな銃だ。

口径は9 mm×19。ライフリングは六条右回り。重量は709グラムで全長は180ミリと非常にコンパクトながら、それでいて装弾数は15発（薬室も含めれば16発だ）という大容量を誇る。

そして何より、このデザインがたまらない。近未来を思わせるスタイリッシュなフレーム。色彩もスタンダードな黒を基調としているながら、マガジンイジェクトボタンやテークダウンレバー、セイフティレバー等に鮮やかなシルバーが使われており、美しい一言に尽きる。

銃器に関して無知な人に言わせれば、銃なんてどれも同じに見えるらしいが（中学の友人はMP5とM16を同じだとぬかしやがった、MP5とM16をだぞ!？）、それは黒人なら誰でも同じに見える的な、要するに見慣れていない対象を視認しようとした時に起きる、大雑把な外見特徴のみを捉えようとする愚かしい思考回路だ。

僕のような人種、つまりガンマニアからすれば、銃だって千差万別の十人十色だというのに。

まあ、僕だって自分の興味のない分野（例えばアイドルやファッション）になれば同じような現象に見舞われるので、あまり強くは言えないのだが。それにしたってMP5とM16の区別も付かないとは、あまりにも酷い……。アイドルに喩えるならば、オグラユウコとイソノキリコを間違えるようなものである。いや、ちよつと違うか……？

「そしてこの解が4になれば――おいっ、さえぎ冴木！ 聞いているのかっ」

「え？」

自分でも気付かない内に僕の授業態度はよほど劣悪なものになっていたのか、前田に注意されてしまった。

「あ、はい。聞いてます」

僕のぼそぼそとしたその返事で前田は満足したのかどうなのか、眉間に皺を寄せて、軽く嘆息したが、授業を再開した。

一度僕に集まったクラス中の視線は、再度黒板に戻る。何人かの生徒は肩を叩き合いクスクス笑っている。嫌な感じで嘲笑っている。僕が嘲笑されているのだ。

「……」

僕はこのクラスでういていた。イジメられているわけではないし、避けられているわけでもない、ただただういていた。

この県立高校に入学してから、だいたい半年が経ったが、僕は未だクラスに馴染めていない。……いや、この言葉は正確ではない。馴染めていないというよりも、馴染もうとしていないというべきか。それは孤高を気取ってるわけではなく、単に僕は人見知りなのだ。みんなと仲良く楽しい高校生活を送りたいという気持ちもあるにはあるが、人見知りなんだから無理をして仲良くなる必要はないという気持ちの方が強い。

社交に関して怠け者、うん、この言葉がピッタリだ。

「さっきの問い五で解いたように、このエックスには同じ関数が――」

前田の高説に耳を傾ける振りをしながら、僕は妄想する。

僕が今さっき描いたこのFNPMピストル。これが具現化し、目の前に現れたとしよう。

マガジンにはホローポイントの弾丸がフルに装填済みだ。

どうする？ 撃つに決まってる。これは想像だ。

誰を撃つ？ 前田に決まってる。これは妄想だ。

さっきの意趣返しというわけではないのだが（前田はどちらかと言えば好きな教員だ）、一番照準し易い位置にいる前田。教壇の脇に立つという自分の授業スタイルを呪うんだなとか何とか、僕は心の中で呟きながら立ち上がり、右腕を伸ばす。その手に握られているのは当然、FNPMピストル。左手を添え、スライドを引く。カシャンと、弾倉から押し上げられた初弾が薬室に装填される手応え。たまらない。

身体を斜に構えた堅実な両手保持で、照門越しに照星を、そして照星越しに前田の顔面を窺う。驚愕の表情を浮かべる前田と呆けるクラスメイト達。左手の親指でガチンと、ハンマーを起こし、途端、ぞくぞくと僕の背筋に形容しがたい快感が奔る。

前田（標的）の顔がぼやけ、照星がはつきりと見える、照準時にベストな視界だ。

そして僕は素早く、それでいて徐に、引き金を絞る。

撫でるようなトリガープルで、機関部が躍動し、撃鉄が落ち、弾丸の雷管に撃針が穿たれ、炸薬が爆発、薬莢（母体）から切り離され、個体としての生を受けた弾頭（赤子）は六条右回りのライフリングにより、凶悪な殺人弾頭（大人）へと急成長。ぎゅるぎゅると超高速回転しながら、初速を伸ばしていく。

そして驚愕の表情のままの前田の眉間に、ドリルのように侵入し、着弾の衝撃によりホローポイントの弾頭は変形、剃刀の刃のようにになって、前田の脳漿を滅茶苦茶に切り裂き、前田は即死。

しかし弾頭の仕事はまだ終わらない。弾頭が停止してもその爆発的な推進力は慣性に従い前田の死体に引き継がれる。その推進力は

イコールで抑止力、つまりストップピングパワーとなり、前田の死体は頭部を後ろに反り返らせ、派手に黒板に打ち付けられた。白いミミズ文字で埋め尽くされていた黒板に、赤という彩りが飛び散る。紅と呼ぶには汚過ぎる、粘ったような濁った赤だ。

未だ状況を飲み込めないクラスメイト達。

カツンと、空葉莢が床に落ち、不規則的にバウンドしながら、雷管を下にして立つように停止。その弾頭が切り離された穴からは、ゆらゆらと硝煙が立ち上る。

そしてようやく状況を理解したクラスメイト達は泣き叫びながら、逃げ出す。まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。誰一人、前田を気遣う者は居ない。

パニックの渦と化した教室で、僕は更なる興奮と高揚に身を震わせながら、我先にとドアに殺到する学友達を、順番に確実に撃ち貫いて――

キンコンカンコン、と。妄想がそこまで至ったところで、聞き慣れたチャイムが響いた。

日直の礼により、前田（勿論生きてる）は退室し、休み時間に突入する。

僕はノートやら教科書やらを机に仕舞い、次の教科（国語だ）の道具を並べてから、小さく自嘲した。

こんな危ない妄想する奴が、楽しい高校生活なんて、笑わせる……。

そして頬杖を付き、窓の外を見る。

空が青い。もう夏だ。

そういえば、もうすぐ夏休みだ。

1 (後書き)

碌なプロットも書かずに書き始めたこの作品（申し訳ない）。

完結できるように頑張ります。

評価、コメント、誤字脱字の指摘、なんでも結構ですので伝えてもらえたら嬉しいです。

終業式の諸々の工程は予想以上に早く終わり、クラスでのホームルームも思っていたより簡素なものだった。高校最初の夏休みなので、僕は色々和小五月蠅い注意事項を聞かされると思っていたのだが。高校生にもなればもう大人、ということなのだろうか。

カラオケなど、海など、夏祭りなど、遊びの約束で盛り上がるクラスメイト達。僕は足早に教室を出た。

出て考える。帰ってもする事がない。最近買ったゲームはクリアしちゃったし、漫画も然り、エアガンコレクションを愛でてもいいのだが、そんな気分じゃない。

「……………」

久しぶりに読書でもしようかなと思いたって、僕は図書館に歩を向けた。

この校舎は四階建てで、一番上の階、つまり四階に僕達一年生の教室がある。下の階に下りるにつれ、反比例するように学年が上がっていき(変なところで年功序列だ)、一階には教員室と様々な実験教室が並んでいる。図書室は二階の奥に位置する。故に、二階に教室を構える三年生が優先的に利用でき、一年生にはなんとなく近寄り難い雰囲気がある。しかし、僕は比較的空氣を読まない人なので、普通にお邪魔させてもらう。

両開きのドアを開け、お目当ての海外の翻訳小説コーナーを目指しながら、横目で繁盛具合を確認。入学してから数回利用した程度の経験で判断するのも憚られるが、今日は割りと混雑していた(やっぱりほとんど三年生だ)。混雑と言っても座れないほどではないのだが、図書室はいつも閑古鳥の大合唱フルコーラスというイメージがあったの

で、ちょっと新鮮だ。

奥に位置した（不人気で奥に追い遣られた）翻訳小説コーナーに辿り着き、物色する。狙うは勿論、こてこてのミリタリーサスペンスものだ。

お、この作家新しい本出したんだ。またボブおじさんの話かよ。六十歳って……、いい加減引退させてあげろよ、おお、だが今回の舞台は日本だ、などと思いつつ、その本を手に取り、隅の席に座る。僕は図書持ち出しカードなるものを作っていないので、ここで読むしかない。まあ、家で読んでも学校で読んでも本は本だ。第一、返しに来るのが面倒臭い。

「……………」

僕は一文字一文字丁寧に読む人なので、読むのが非常に遅い。読む対象の良し悪しにも左右されるのだが、三百頁前後の文庫本を読了するのに要する平均時間は丸一日といったところか。

なので二時間ぐらいかけて二十五頁ほどを読み終えた頃、

一人の女生徒が僕の対面の席に座った。

「……………」

僕は辺りを見渡す。

混雑していた図書館内の人気は引き、カウンターに座る図書委員と、数名の本の虫っぽい生徒がいるだけだ。つまり、空いている席は他にいくらかでもある。それなのになんでわざわざ僕の対面に座るのだろう。何かの罰ゲームだろうか。それとも自分に対する戒めだろうか。しかし、僕達の席の様子を遠目から嘲笑っている人影はないし、対面の彼女は至って平常な顔で本を読んでいる。

と。その顔には心当たりがあった。入学して間もない頃だったか、体育の授業が終わり、グラウンドから教室に戻る時、これから体育なのであろう三年生の集団とすれ違った。その集団の中にこの女生徒が居た気がする。なぜそれだけの出会いなのに顔を覚えていたのかというと、彼女はとても人目を引く容姿の持ち主だったからだ。腰までありそうな艶やかな黒髪、前髪は眉の辺りでパツツンに切り

揃えられ、ちょっと眠たそうな奥二重がなんとも魅力的だった。素直に美人だと思った。深窓の令嬢とは彼女のための言葉なのではないか、とも思った。

「……………」

その先輩であろう彼女が、寸分違わぬ容姿で僕の目の前に鎮座なさってる。

まあ、だからと言ってどうということもない。残念ながら僕は一目惚れするほどベタではないし、美人だからという理由だけで声を掛けるほど軟派でもない。

まあいいか、と視線を本に戻した。その直後、

「ねえ」

唐突に、彼女が声を発した。

僕は左を見て、右を見て、後ろを見た。誰も居ない。恐る恐る彼女に目をやると、その眠たそうな優しい瞳は僕を凝視していた。

僕は自分を指差してみる。

すると彼女は口に手を添え、くすくすと上品に笑う。

「きみ、面白いね。他に誰が居るっていうの？　きみに話掛けてるんだよ」

「……はあ」僕は俯くように頷き、口を開く。「なんでしょうか？」

「それ」と彼女は僕の読んでいる本を指差した。「どれぐらいで読み終わるかな？」

「え？」

首を傾げながら、なんとなく彼女の持っている本の背表紙を見てみた。それは僕が読んでいるのと同じ作家が書いた小説で、こてこてのミリタリーアクションものだった。なるほど、理解できた。彼女は僕の読んでいる本を目当てに僕に近付いて来たのだ。

それにしても深窓の令嬢には似合わない趣味である。いや、本当に深窓の令嬢なのかどうかはわからないのだけれども……。

「えっと……………読みますか？」

僕は本を閉じ、彼女に差し出す。

彼女は一瞬目を丸くし、すぐに表情を崩して顔の前で手を振る。

「いやいや、いいよ、そんな。きみが読み終わってからで。……えっと、きみ一年生だよな？　わたし、そんな横暴な先輩に見えるかな？」

「いえ、すいません、そんなことないです」僕は首を振る。「でも僕、読むの遅いんで、終わるの待ってたら明日になっちゃいますよ？」

「そっか…、それなら明日でいいよ。別にわたし急いでるわけじゃないし、夏休みは長いんだしさ」

「はあ、そうですか」

まだ二言三言の、会話というのもおこがましいぐらいの遣り取りではあったが、意外に話し易い人だな、僕はそう思った。美人というのは、それだけで近寄り難いオーラがあるし、見ているだけで劣等感に苛まれ、世の不公平に神を呪う、という偏見に近い先入観が僕にはあったのだが、案外そんなことはなかった。それは単に彼女がフランクだということもあるのだろう。人見知りの僕でも喋り易い。

「この本読んだことある？　わたしはもう二回目なんだけどさ。何度読んでも面白いよねえ」そのフランクな彼女は言う。「M40でベトコンを撃ち抜きまくるところとか、最高」

僕は一瞬耳を疑った。そしてすぐに聞き間違いではなかったことを確信し、吹き出しそうになってしまった。M40とかベトコンとか、今を時めく女子高生の口から発せられた単語だとは到底思えない。しかもこんなに可憐そうな女性が、言うに事欠いてベトコンって……あまりにもアンマッチだ。

「そうですね。僕はクレイモアによる牽制や、ナパームの爆撃とか、好きですよ」

「あは、やっぱりきみも読んだんだ。このM3グリースガンの掃射のところとか、いいよねえ」

「ですね。主人公の相棒がM14でチャーリーをやっつける姿も、いいですよ」

「おっ、ベトコンのことをチャーリーと呼ぶとは、きみも中々通だねえ」

僕のさりげない鎌掛けに、彼女は見事に反応してくれた。ということは彼女も中々以上に通のようだ。

この後、僕と彼女は時間を忘れて銃器談義に盛り上がった。ここが図書館であるということを忘れて、声のボリュームを間違え、図書委員に睨まれたりした。それほどに盛り上がった。

気付くと、時刻は午後六時を回り、足の速い夏の太陽は沈みかけていた。

図書館内には、離れたカウンターに座る図書委員と、僕と彼女しか居ない。

「わあ、もうこんな時間なんだ。全然気付かなかった」

彼女は言ってから、大仰な伸びをする。

「ですね。そろそろ図書館も閉まるんじゃないですか？」

「うん。こんなに図書館に居座ったのは初めてだよ」彼女は窓の外を眺めて、それから僕を見て、微笑んだ。「それに、趣味の話でこんなに盛り上がったのも初めて」

「……ええ、僕もです」

お世辞ではなく、本心からそう思った。自慢じゃないが、下手をしたら登校して一言も喋らずに下校する日もあるこの僕だ（本当に自慢じゃない）。高校に入学してから、学校でこんなに喋った（しかも銃の話）のは初めてだった。これほど長時間会話を行っていたという事実が、本当に驚異的だった。驚天動地と形容しても決して大袈裟じゃないほどに。

「じゃあ、わたしそろそろ帰るね」彼女は立ち上がる。「ごめんね、長話に付き合せちゃって」

「え？　いえいえ、僕も楽しかったですよ。……とても」

本を返却して、「じゃあね」と片手を上げて去って行く彼女に、

「はい」と僕も片手を上げて応じた。

漆黒の髪が歩に合わせて揺れている。そんな優雅な後ろ姿を見ながら、

僕は思った。

これから約二年と半年続くであろう僕の高校生活、それに、こんな風にこの先輩と会話をする機会は含まれているのだろうか。

いや、おそらくない。絶対、ない。

「あの」

そう思った僕は、ほとんど無意識的に声を発していた。

「ん、なに？」

そして振り向いた彼女に、やや間置いて、考えて、考えて、

「……さようなら」

再び片手を上げた。

彼女は不思議そうな顔をして、それでも「うん、じゃあね」と律儀にもう一度片手を上げてくれた。

「……」

一人残された僕は、しばらくしてから立ち上がり、本を返却し、図書館を後にした。

そこで、少し前から便意を我慢していたことを思い出して、図書館の前にあったトイレに入り、個室に籠った。

「……彼女に、何を言いたかったんだろうな、僕は……」

膝に頬杖を付いて、考える。

惚れたわけじゃない。痩せ我慢ではなく、それほどベタじゃない。友達になりたかったわけでもない。虚勢ではなく、それほど独りは嫌いじゃない。

ただ、また彼女と話しがしたいと思った。

それだけだった。

しかし、それはなんでだろう……？

用は足したというのに、僕はトイレに籠ったままだった。

「はぁ…」溜め息が零れる。

僕は考え始めたら、いつでもどこでもどこまでも考え続けてしまう悪癖があるので、彼女と別れてからかれこれ一時間以上はこの個室に籠りっぱなしだ。

思考の議題は、勿論、果たして僕は何をしたかったのか、だ。しかし、どんなに考えても明確な答えは出てこない。彼女とまた話しをしたいと思ったのは間違いないのだが、しかし友達になりたかったわけでもないのに、なぜそんなことを考えてしまったのかという次のステップで、僕の脳内会議は紛糾する。

つまり、僕は自分がわからない。そして、僕はそんな自分が大嫌いだ。

自分の気持ちすらわからないのに、他人の気持ちなんてわかるもんか。

自分の事すら好きになれないのに、他人の事を好きになれるもんか。

ふうと、再び嘆息して、頭上を見上げた。

それと同時に、突然、トイレの照明が落ちた。

「……？」

僕は目をぱちくりさせてから、状況を理解した。トイレの外から誰かが遠退く足音がする。どうやら見回りの教員が照明を落としてしまったらしい。

つまり強制下校時間を過ぎてしまったのだ。

「マズイな……」

とか呟いてみたものの、冷静に考えれば別段マズくはない。教員に見つからないように速やか且密やかに、脱出すればいいだけの話だ。たとえ見つかったとしても、適当な言い訳をしておけば問題ないだろう。ここはナチスの捕虜収容所ではないし、教員もドイツ軍の親衛隊じゃないのだ（もしかしたらファシストかもしれないが、だとしてもどうでもいい）。

僕は教員が遠退くのを待ってから、静かにトイレを離れた。

電気が落ち、窓から差し込む街灯の明かりだけが頼りの廊下は、普段見慣れた景色とは様相を呈していて、とても新鮮だ。

……なんだかわくわくする。

調子に乗った僕は軍事雑誌を読んで体得した無音歩行法（踵からゆっくり足を落とすだけなんだけど）を実践し、前後左右を警戒しながら慎重に歩く。

気分はスパイ。この手にサプレッサー付きのワルサーでも握られていれば、言う事なしだ。いや、出来ればMP5SD6が欲しいな。僕は非現実的な諜報員スパイなんかよりも現実的な特殊部隊員オプスに憧れる人なので、映画のように拳銃一丁で敵地を闊歩するより、こういう場合は出来ればサブマシンガンレベルの火力が欲しい。

とかなんとか、そんなどうでもいい妄想をしながら、職員室がある方向の反対の階段を下りた。階段出口の壁に張り付き、顔だけを覗かせ一階廊下の様子を窺う。

と。誰かいた。

数十メートル前方、僕の居る方から離れていく後ろ姿だ。見回りの教員？ いや、違う。暗いしよく視えないが、あの服装は生徒の制服だ。スカートを穿いてるのでどうやら女子生徒のようだが……もしかしてあれは……。

揺れるロングの黒髪に既視感を覚える。

まさか、あれはさっき話した先輩か……？

あれから一時間以上経っている。帰ったんじゃないのか？

僕は迷った。声を掛けるか否か、だ。まだあの先輩だと確証を得

たわけではないが、違ったとしても僕と同じ生徒という身分ならば、別に声を掛けてもバチが当るわけでもない。ただ、その後ろ姿には気軽に声を掛け難い雰囲気があるのだ。

僕と同じような歩行術で、ほとんど足音を発さずに歩き。極端に壁側に寄って歩いているのは、窓から差し込む光を避けるためだと容易に推測できる。つまり、彼女もまた、誰かに見つからないように移動しているのだ。

「………」

どうするか決めかねていると、彼女は不意に立ち止まり、こちらに首を――。

僕は咄嗟に頭を引っ込めた。見つかってしまっただろうか、と心音を高鳴らせてから、冷静に思う。なにやってんだろいうなあ、僕は見つかってしまっただろうかって、別に見つかってもいいじゃないか。なんで隠れて覗き見るような真似をしているんだろう。これじゃ僕、ストーカー……。

もし僕が警察に補導されたら、クラスメイト達は『あいつなら、いつかやるんじゃないかって思っていました』とか言うんだろいうなあ、などと栓のないことを考えつつも、僕は再び角から頭を出し、廊下の先を覗く。

彼女がこちらに気付いた様子はない。ある教室の前で立ち止まったまま、首を振り、左右を警戒してから、静かに扉を開け、その中へと消えてしまった。

――消えてしまった……？

「……え？」

今の“消えてしまった”は、見えなくなってしまったの比喻や誇張ではなく、本当に消えてしまったのだ。

横にスライドする扉を開け、廊下とその教室の境目、鉄製の敷居を跨いだ瞬間、彼女の身体が“消失”したのだ。そう消失だ。忽然と、唐突に、パッと、彼女の身体が消えてなくなった。少なくとも、僕の目にはそう見えた。

「……まさか、な」

そんなわけがない。そんなのは物質世界の理に反する。学業の成績優秀が芳しくない僕でも、質量保存の法則ぐらい知っている。物質は突然に消えてなくなったりはしないのだ。たぶん僕の目の錯覚だろう。教室の中は暗いから、僕が瞬きした瞬間に見えなくなってしまったただけなのだろう。

僕はその教室に近付き、中を窺う。この教室はグラウンドに面しているため街灯からの明かりが皆無で、暗くて何も見えない。たしかここは視聴覚教室だったはずだ。ほとんど使われることのない、この学校のデッドスペースのような教室。

「……」

しかし、彼女は確かにこの教室に入ったはずなのに、誰かが居る気配はない。まあ、暗いのでわからないだけかもしれないが。

僕はなんともなしに、ちよつと入ってみてすぐに出ようというぐらしいの気概で、敷居を跨いで、教室に入った。すると、

唐突に視界が暗転した。

何も見えない。真っ暗だ。目蓋を閉じたのではないかというほどのブラックアウト。

誰かが外から扉を閉めたのだろうか、と僕は振り返るが、真っ暗なので扉すら見えない。

しかし——、真っ暗だったとしてもだ。一メートルも離れていかなかったはずの扉、そこに目掛けて手を伸ばすも、その手が空を切るのはどういうわけか……？

僕は床に直立不動で立っているはずなのに、足の裏に自分の重みを感じないのは、如何なる理屈か……？

それに、真っ暗なはずなのに、まるで四方から照明を当てられているかのように自分の身体だけが嫌にはつきりと、不自然なぐらい

鮮明に見えるのは、なんなんだこれは——？

暗闇というよりも、これは無だ。

自分が存在し、自分だけしか存在しない世界。

他の誰も、他の何も、物質すら存在しない。

僕の身体だけが有り、僕の意識だけが在る、僕だけの世界。

とてつもなく、筆舌し難いほどに、蕩けてしまうように、心地良
い——。

徐に、

その奇妙なブラックアウトは、それこそゆっくりと目蓋を開くよ
うに、治まり、

光を取り戻した僕の網膜に焼き付くのは、視聴覚教室ではなくて、
薄暗い小部屋と、一丁の拳銃。

そして、

『Welcome to the Holy Lance War』

この意味不明は英文だった。

そこは、中世の牢獄をイメージさせる小部屋だった。

灰色のレンガを隙間なく並べたような床と壁には、扉も何もない。頭上を見上げてても天上が見えない。どうやらかなり天上が高いらしい。これでは牢獄というよりも、まるで落とし穴のような構造だ。しかし無論、僕は落とし穴に落ちた覚えはない。先輩に似た女子生徒の後を追って視聴覚教室に入った、その瞬間、視界が暗転し、視界が回復した時には、すでにこの部屋に居た。まるで最初からここに居たという風に。

「……？」

そこでふと、僕はこの部屋の違和感に気付いた。いや、違和感なんて言い出したらこの状況の全てが完膚なきまでに違和感だらけなわけだが、とにかく気付いた。

この部屋には明かりがない。

電灯、ランプ、蝋燭、なんでもいいがその類の照明になるものが、この部屋には皆無なのだ。光が差し込む窓もない。それなのに、ここは薄暗いだけで、少なくとも部屋の全容を把握するに困らないほどの明度は保たれていた。光がないのに見えるという矛盾。

まるで月明りに照らされているような明るさだ。……明かりがないのに月明りに喻えるなんて、自分でも不適當だと思うが、しかし実際にそんな風なのだから仕方がない。

「……………」

僕はそこで再び、正面の壁に刻まれた文字に目をやる。壁を削って書いたような文字なので、ギザギザでかなり読みにくいだが、それでも辛うじて読める。

「……Welcome to the Holy Lance War……？」

意味不明だった。

僕は英語も含め全ての教科において成績がよろしくないのですが、あまり自信はないが、たぶん読み方はこれで合っているはずだ。

Welcomeの件はわかる。ようこそ、だ。しかしその続き、Holy Lanceとはなんだろう。読みはホーリーランスで合っているのだろうか。

ホーリー、聖なる？ ランス、槍？ 聖なる…槍…？ 聖槍……？
せいそう

そして、War……。この意味は良く知ってる。この学校で僕以上にこの単語について精通している人間は少ないだろう（もしくはあの先輩なら僕以上かもしれない）と自負するほどだ。

つまり“戦争”。

「……聖槍戦争へようこそ、か……」

日本語訳できたとしても、意味不明だった。

続いて僕はその文字が書いてある下、壁から一つだけ飛び出したレンガ、その上に乗っている物に注目し、そして刮目し、瞠目する。拳銃だ。

いや、拳銃だとは一目見たときからわかっていたのだが、瞠目したのはその銃に心当たりがあり過ぎたからだ。

————FNモデル・FN P9Mピストル。

口径は9mm×19。ライフリングは六条右回り。重量は709グラムで全長は180ミリと非常にコンパクトながら、それでいて装弾数は15発（薬室も含めれば16発だ）という大容量を誇る。

そして何より、この特徴的なデザイン。近未来を思わせるスタイリッシュなフレーム。色彩もスタンダードな黒を基調としていながら、マガジンエレクトボタンやテークダウンレバー、セイフティレバー等に鮮やかなシルバーが使われており、美しい一言に尽きる。

……そこにある銃は、オートマチックピストルの中では僕が一番好きな拳銃だった。

僕は生唾を飲み込み、ほとんど無意識的に、本能的に目の前のFNP9Mに手を伸ばした。

その瞬間、

『おやおや、おやおやおやおや。あたしの持ち主さまは随分と落ちていていらっしゃる』

「！」

声が聞こえてきた。

僕は飛び出しそうになった悲鳴をなんとか抑えて、前後左右に首を振る。誰もいない。

『いきなりこんなところ飛ばされたら普通もつと動揺したりするだろう？　ははあく、さてはあたしの持ち主さまは普通じゃないと見た。つまり異常だわさ。はっはー、それは結構こけこっこーってね。…今の笑うとこだよ』
笑えるわけない。

だってこの部屋には僕以外誰も居ないのに、なんで声が聞こえるんだ？　マイクで話し掛けられてるような感じじゃない。声ははっきりと目の前から聞こえてくる。

……目の前？　目の前にはFNP9Mしかない……。

『もつとも、あたしだって今さっき生まれたばかりだから、持ち主さまと比較するべき他の人間を知らないんだけど、それでも持ち主さまが普通じゃないってことぐらいはわかるよ』

よく喋る謎の声だ……。

「あの……」僕は恐る恐る口を開く。「誰、ですか？　どこに居るんですか？」

『ああん？　誰かは答えられないな。だってあたしにはまだ名前がない。ってかそもそも誰って質問がおかしいんだわさ。誰ってのは人間に対して使う言葉だろ？　だからこの場合は、“なにですか”、だ』それに、と謎の声は捲くし立てるように続ける。『どこに居るんですかって質問もおかしいよ。だってあたしはずっと持ち主さまの目の前で微動だにせず鎮座してるじゃないか』

「……は？」

持ち主さまっていうのは、僕のことだろう。

そして目の前には、くどいようだが目の前にはFNP9Mしかない。

『おっ、今日が合ったね。そうそう、あたしだわさ。持ち主さまが今凝視してるのが、あ・た・し』

意味がわからない。

この声は、FNP9Mのことを自分だと言っているのか……？

ふざけてるのだろうか。ふざけているのだろう。

『おや？ 信じてないようだね。ここに飛ばされたときはあんなに落ち着き払ってたくせに、こういうファンタジーな異常には付いて来れないのかい？』

その自称FNP9Mの声は若い女性の声色で、なんだか鼻に付く険悪な口調だった。

『まあ、いいさ、別に信じなくても。あたしが何物かなんて、どうでもいいことだわさ。ただ、これからあたしが話す説明だけはしっかり聞いといた方がいいよ』そこで自称FNP9Mは意味深に間を置き、そして言う。『なんたって、持ち主さまの命に関わることだからね』

「……」

自称FNP9Mの言うファンタジーを信じたわけじゃない、それなのに僕は目の前のFNP9Mをまるで人間を見るようにじいっと見据えた。命に関わるというその言葉に、軽い緊張感を感じたからだ。

コホンと、わざとらしく咳払いして、その声は続く。

『たった今、持ち主さまはある戦争への参加資格を手にした。あたしの上に書いてあるだろ？ Welcome to the Holy Lance Warって。ホーリーランス・ウォー、つまり“聖槍戦争”だわさ。聖槍ってのは知ってるかい？』

僕は首を横に振る。

『おやおや、持ち主さまは学がないねえ。聖槍ってのは通称で、正式名称は“ロンギヌスの槍”という聖遺物の一つだわさ。キリストさんの死に様は知ってるだろ？　ゴルゴタの丘で十字架に磔にされて、放置プレイさ。そして死んだっぽいキリストさんの死亡確認をするため、わき腹を刺したとされる槍が、ロンギヌスの槍だわさ。ロンギヌスさんが持ってたからロンギヌスの槍。安直だよねえ。まあそんな昔話どうでもいいんだけど』

キリストさんとか放置プレイとか死んだっぽいとか、なんだかその手の人が聞いたら憤激しそうな物言いだが、僕は突っ込まない。今は黙ってこの声に耳を傾けるのが状況を知るための近道だと思うのだ。

『で、そんな聖槍にはとっても素敵な効能があってね。実は《所有するものには世界を制する力が与えられる》んだわさ』

「……」

効能って、そんな当然の仕様みたいに言われても信じられるわけがない。世界を制する力なんて、全然具体的じゃないし。

僕の懐疑的な顔色を意に介した風もなく、自称FNP9Mは続ける。

『その効能を欲するがために、一本しかない聖槍を巡って人間達が争うのが、ずばりこの聖槍戦争だわさ。……いや、これは正しくないのか。聖槍はあたしと同じように意思を持っていてね。だから自分に相応しい持ち主を選定するために、この戦争を自ら主催してるんだわさ。つまりただ単純に人間が争うんじゃないくて、聖槍が決めたルールに則って争わされる、って言った方が適切だね』

「……」

『そのルールは別に複雑なもんじゃない。大雑把に説明するよ。まず一つ、この空間のどこかにある聖槍を最初に手にした者が勝者。まあ、競争ってわけさね。一つ、参加者は他の参加者を自由に妨害できる。妨害なんてソフトな言い方したけど、どうせ殺し合い必死だわさ。そして一つ、参加者には各々に合った武器が一つだけ支給

される』

「……武器？」

FNP9Mを凝視したまま呟いた。

『そ、あたしが持ち主さまに合った武器ってわけさ。ナイスチューミーチュー、以後よろしくだわさ』

僕は今、自分がどんな顔をしているのかわからない。まったくもって理解不能だ。いや、この声の言うことはなんとなしに理解できたが、理解はできてしまったが、十五年間平々凡々と培ってきた常識というフィルターが信じることを許さない。

そんな僕の心境に構わず、声は続く。

『ま、詳しい話はおいおいね。とりあえずぼーとしてないで触ってごらんよ。あたしの豊満なボデーをさ』

「……ほ、ほうまんなボデー……」

仮にこの声が目の前のFNP9Mのものだったとしても、決して豊満ではないだろう。豊満な銃といえば普通デザートイーグルとかソーコムとか、大型拳銃を指すだろう。9mmの拳銃は豊満というよりも華奢な感じだ。

でも、とりあえず僕は言われるがまま、FNP9Mに手を伸ばし、そのグリップを握った。

『あんっ、そこは、だめだわさ。もっと優しく……』

「えっ！？ ご、ごめん」

妙な声に、僕はおもわず銃をレンガの上に戻した。

『あは、あっはっはっはっはっは！ 冗談だよ冗談。あたしには神経が通ってないから、感じもしなきゃ痛くもないさ。持ち主さまはウブだねえ。さては童貞だろ？』

……畜生。

なんなのだ。何がしたいのだこの声は……。

『さあ、気を取り直して、あたしを掴め。さすれば道は開かれん』
僕は再び、恐る恐るFNP9Mのグリップを握った。強化プラスチック製のグリップが、手にしっくりと吸い付くようにフィットす

る。そしてこの重みと冷たさ。握った瞬間わかった。これは実銃だ。エアガンでもモデルガンでもない。生物を殺めるためだけに製造された、真正正銘の実銃だ。

その時、突然に、

音もなく、目の前の壁が消えてなくなった。

「―――！」

あの視聴覚教室のように真っ暗で、一メートルも、いや、一ミリも先が見えない暗黒の空間。

それが目の前に、広がっている。

『さて、持ち主さま。最後に一つ、言っておこう。持ち主さまは聖槍戦争への参加資格を手にした。手にしたけれども、これは強制じゃない。制限時間までこの部屋に籠っていれば危険はない。そしてもう二度と夜の学校をうろつかなければ、参加することもない』
今まで皮肉じみた感じだった声色は、ここで初めて深刻な風になる。

『しかし、一步を踏み出してその闇に入れば、そこはもう戦場だわさ。出た先にいきなり誰かが居て、そいつに即行でぶっ殺されても、文句は言えない』

戦争だからな、と自称FNP9Mは言う。

『それでも、持ち主さまは先に進むかい？ それともここに閉じ籠るかい？』

僕は、

僕はFNP9Mのマガジンを抜き、ホローポイントの弾丸が装填されていることを確認、グリップ内にマガジンを戻し、スライドを引き初弾をチャンバーに送り込む。カシャン。軽快な音が小部屋に響く。たまらない。

そして、

そして僕は一步を踏み出した。

視界が暗転し、身体と意識が無に支配される。

面白そうだ。

そう思ったのだ。

よくわからない、本当に何がなんだかわからないが、後から考えたら今の僕はとてもまともな精神状態じゃなかっただろうが、とにかく、とても面白そうだ、と。

そして、そんな僕の心中を見透かしたかのように、陽気な調子で謡うように、自称FNPMは言った。

『ようこそ持ち主さま、聖槍戦争へ。持ち主さまの戦争がたった今、開戦した』

Welcome to the Holy Lance War
ご武運を……。

刹那の視界暗転が終わり、僕の意識が明確になった先は、灰暗い通路だった。

後ろには壁があり、前方には灰色レンガの通路が延々と続いている。さっきの部屋と同様、光源がないのに薄ら明るい。一昔前のゲームに出てきたダンジョンのような不気味際立つ通路だ。ちょうどさっきの部屋を真横に倒したような感じである。

「……ここは？」

僕は誰に言うでもなしに呟いた。

すると、

『さあねえ。あたしも初めてだからわかんないさ。最初に言っておくけど、あたしが知ってるのはこの戦争のルールだけだわさ。戦場の地形や攻略法なんて期待されても無駄だかんね』

僕の手に握られているFNP9Mの方から自称FNP9Mの声をした。

なんだかややこしいな……。しかし、この銃が意思を持って喋っているなんて信じられるわけがない。僕の脳はそこまで病んでいない。

「……あのさ」しかしそれでも、僕には訊かなくちゃいけないことが山積みだ。「幾つか訊いてもいい？」

『なんだい？』

「えっと、僕が学校の視聴覚教室に入ったらいきなり真っ暗になって、それで気付いたらさっきの小部屋に居ただけど、どういうこと？」

『あは、あっはっはっはっはっは！』自称FNP9Mは唐突に

爆笑する。『そういうことは普通最初に訊くもんだろ！？ 躊躇わず戦場に來たくせに、今更そんなこと訊くなんて、やっぱ持ち主さまはおかしいよ』

「……………」

『あれ？ 怒った？ 褒めてるんだけどねえ。ま、とにかく、どういうことって言われても科学的な理屈は説明できないよ。魔法とか超科学とか、まあなんでもいいけど、とにかくそんなもんだと適当に納得しといてくれ』

納得できるわけがない。

しかしそんなのはどうでもいいという風に、自称FNP9Mは話題を変える。

『聖槍戦争の仕組みを説明するとだね。持ち主さまの通う学校で、ある期間中だけ聖槍戦争は開催される。七月の月末から八月の月末までだわさ』

「八月末まで…、夏休み中だけってこと……？」

『で、その期間中に夜の学校を彷徨い、更に聖槍の御眼鏡に適った者だけが、この空間に飛ばされて、聖槍戦争への参加資格を与えられる。持ち主さまみたいにね』

「え？ ちょっと待って。さっきから学校って言ってるけど、ここは僕の学校なのか？」

『違うよ。学校には“入り口”があるだけだわさ、ここは全く別の次元の異空間っていうか……あー、もう面倒くせえなあ。適当に学校の地下だとも思っとけばいいさ』

こんな状況だというのに、さっきから適当過ぎるだろ……。

『ここが何処だかなんてどうでもいいんだよ。とにかく、如何なる経緯があったのかは知らないが、聖槍は持ち主さまの通う学校に目を付け、ここで自分に相応しい持ち主を選定するための戦争を主催してるってこと。かれこれ今年で二十年目らしいよ。記念すべき二十周年ってわけさね』

言って、自称FNP9Mは可笑しそうにけらけら笑っているが、

それはつまり……。

「えっと、その戦争は二十年も続いてるってこと？ それって……」

『おっ、あたしの持ち主さまは学が無い割りに頭の回転が速いねえ。助かるよ。そう、その通り。この戦争は始まってからずっと、ずっと続いてるんだわさ。つまり、まだ誰も聖槍を手にしていない』
誰も勝利してない、と自称FNP9Mは続ける。

『一度参加資格を与えられた者は学校を去るか死ぬまで、その資格は継続する。資格所有者は毎年このシーズンに参戦するってわけだわさ。そして、この学校と関係のない身分になったらお終いさ。聖槍戦争に関する一切の記憶が消されて、資格も剥奪される』

「ちょ、ちよっとタンマ」

僕は自称FNP9Mの言葉を制し、そして今までの情報を脳内で反芻する。

学校は入り口で、夜に校内をうろついた者に参加資格……？

参加資格を与えられた者は学校を去るまで資格が継続……？

学校と関係のない身分になったらお終い……？

その言い方じゃあまるで……。

つまり、この戦争の参加者というのは……。

不意に、物音がした。

遙か前方の暗闇から、何かが勢いよく飛び出すような風切り音。

一瞬の刹那を置いて、僕の右脇を高速で何かが通り過ぎる。

ビシンッと、その何かは後方の壁にぶつかり、僕の足下に転がってきた。

矢？

端に羽が付いて、他方の端に鋭い鍔やじりが付いた、矢だ。

『おやおや、おやおやおやおや。あたしの持ち主さまは随分と運がないようだ。さっそく他の参加者に出くわしちまったらしい』

自称FNP9Mの声に、僕は呆けながらも前方を凝視した。

すると、人影が二つ、暗闇から歩み出てきて、僕の二十メートルほど前方でその姿が顕になる。

一人は細身で茶髪の女性。

「あれえ？ 外してるじゃーん。たっくん、ダサーい」

一人は背の高いロン毛の男性。

「うっせえな、わざと外したんだよ。あいつどー見てもルーキーだろ？ いきなり殺しちゃかわいそうだ。ちょっと遊んでやろうぜ」
女性の方は魔法使いが持っているような褐色の杖を持っていて、男性の方は銀色の弓を持っている。

そして、

そして二人とも、僕が見慣れた、僕と一緒に、学校の制服を着ていた。

「――」

その二人には見覚えがあった。

いつだったか、校内で擦れ違った記憶がある。

ベタベタとくっ付いていて、ケラケラと乳繰り合っていたので、カップルだと容易に推測できた。

その二人が、今は武器を持って、僕の目の前にいる。

まるで獲物を見るように爛々と目を輝かせて、下卑た笑いを浮かべながら、僕を見ている。

「なあ」ロン毛の男が僕に話し掛けてくる。「お前初めてだよなあ？ 行き止まりで大声で喋ってるぐらいだから、初心者なんだよなあ？」

「え？ えっと……あの」

返答に詰まる僕。しかし、自称FNP9Mが大声で喋っていた所為で彼らに聞き付けられたことは推測できた。

「ねえ、たっくん。あいつあたしにやらせてよ」

茶髪の女は言った。

「あん！？ ふざけんなよ。さっきジャンケンで決めたろ。あいつは俺の獲物だ」

ロン毛の男は反論する。

「……………」

ややおいて、二人の言葉の意味をようやく理解し、僕は凍りつく。獲物というのは僕か？　そしてどっちが僕を殺すのかで揉めているのか？

……なんてことだ。

僕は足下の矢に目をやる。これが当たっていたら、怪我じゃ済まなかっただろう。下手をしたら死んでいた。これが殺し合い、戦争、聖槍戦争……。

自称FNP9Mが言っていたことが急に現実感を帯びてきたが、それでもどこか非現実的だ。それはおそらくあの二人が僕と同じ学校の制服を着ているからだだろう。殺されそうなだけでも非現実的なのに、同じ学校の生徒で、しかも見たことのある二人が、僕を殺そうとしているのだ……これが現実的であるわけがない。

「おい、余所見してっと危ねえぞ」

「……………え？」

ロン毛男の声に、僕は顔を上げた。見ると、男はこちらに弓を構えていて、その中央からは鋭い鏃が……………

「ッ！」

僕は咄嗟に身体を左にずらした。

ヒュンと、僕がさっきまで居た場所を高速で矢が通り過ぎ、硬い音を立てて後ろの壁に直撃する。

「おっ！　ナイス超反応！　結構遊べそうじゃん」

「あははー、あの避け方、マジうけるんだけどお」

冷たいものが、僕の頬を伝う。冷や汗だ。

畜生……あの二人は本気だ。

『へい、持ち主さま』自称FNP9Mが小声で言う。『あたしは持ち主さまが“想像”して持ち主さま専用に“創造”された武器だ。使い方はわかるだろ？』

わかる。わかるに決まってる。実際に使ったことはないが、イメ

そんで殺されるの、と。
女は動いた。

高らかに杖を掲げたかと思うと、僕の方に向けてそれを振った。
と、そこから白い光の球が飛び出した。

光の球はハンドボールほどの大きさで、それこそボールを投げるような速度でこちらに近付いて来る。矢に比べたら鈍足だが、それでも速いことには変わらない。僕は飛び跳ねるように左方向の壁に張り付き、それを躲した。

躲すことができた。

僕の心内で小さな安堵感が生まれた瞬間、ズズンと、轟音と振動が背後から響いた。

見ると、後ろの壁からは粉塵が立ちこめ、その壁は、ごっそりと抉れていた。まるでグレネードのHE弾が炸裂したみたいに、灰色のレンガに大きな凹が出来ていた。

「————うそだろ……！」

僕は戦慄する。

アレを喰らっていたら、僕は文字通り木っ端微塵になっていた……。

くそ。さっきから矢を出したり、光の球を放ったり、これじゃまるで魔法だ。

僕が青ざめていると、男の怒声が響く。

「おいっ！ 何やってんだよっ。あいつは俺の獲物だって言ったべ！？ それに、お前の攻撃はいちいち五月蠅過ぎんだよっ！ “奴”に聞かれたらどうすんだっ！」

「大丈夫だって、あいつならきっともう進んでるよ。こんなスタート地点にいるのはルーキーだけだって」

「バツカか！？ もしかしたらってこともあるだろうがっ！」

『……なあ、持ち主さま』二人が揉めているのを見てとったのか、自称FNPMが声を上げる。『あんな奴ら、持ち主さまとあたしなら楽勝だわさ。早く殺っちまおうよ。あつ、もしかして油断させ

て情報を集めようって腹かい？」

そんなわけない。確かにあの二人は油断してるだろうが、その油断を利用しようと思えるほど僕の度胸は据わっていない。できることなら一刻も早く逃げ出したい。しかし背後は行き止まり、前方には二人が居る。逃げられそうにもない。

『それとも何かい？　もしかして殺したくないなんてチキンなこと言うつもりじゃないだろうね？　聞いたろ？　あの二人は参加者殺して愉しんでるんだ、分け与えてやる良心なんて微塵もないよ』

そうなのかもしれないが、確かにそうなのかもしれないが……。『わかってるだろ？　殺らなきゃ殺られるって。自分の命を捨ててまであの二人の殺さないほど、持ち主さまは良い人なのかい？』

そんなことはない。僕だって聖人君主を気取るつもりはない。それに、あの二人は殺る気満々だ。だったら自分が殺されても文句は言えないはずだ。しかし、それでも、それでもだ……。その瞬間、

右眉の辺りに何かがぶつかった。

「————痛ッ」

転びそうになったが、なんとか踏み止まって、額に手をやる。

血だ。

真っ赤な、血が、流れて。

僕の足下に矢が転がる、鏃には血が附着していて。

矢が掠ったのだろうか、眉の傷は熱く、痛い、熱い、痛い、痛い……。

痛いじゃないか————！

「ひゃっは、命中。悪りいけど、このバカがでかい音出す所為でおつかないのが来るかもしれないからさ、次は眉間狙うぜ。もっと上手に避けないと死んじゃうよ？」

死んじゃうよ、か。

僕は死ぬのか。

なぜだろう。死という、その単語を聞いた途端、僕の頭の中であ

る欲求が産声を上げた。

「……もつたいないなあ」

———こんなに面白い事態に巻き込まれたのに、ここで死ぬのは勿体無いなあッ。

そして僕の中で何かが瓦解した。

それは倫理とか理性とか、そんな類のくだらない感情だったと思う。

瓦解したその先で鎌首を持ち上げたのは、殺意なんて抽象的な感情ではなく。

FNP9Mを撃ちたい。FNP9Mで人間を撃ちたい。この男をFNP9Mで撃ち抜きたいという具体的な考え。

そう考えた僕は、今までの逡巡が嘘だったかのように、ほとんど無感情に、無意識に、銃口を持ち上げた。

「は？　おい、おいおいおい。もしかして、そ、それって銃……？」

「え？　ウソ……、ヤバイって、アレ銃だよ。あのルーキー銃持ってるよっ！」

今更気付いたのか、露骨に怯え出す二人。

やはり銃は素晴らしい。その存在自体が圧倒的だ。

外見だけで対象を威圧し、戦闘意欲を削る純粋な暴力の化身でありながら、それでいて美しさを忘れない武器。それは銃意外有り得ない。

わけのわからん魔法の杖や原始的な弓矢なんかよりも、遥かに優れた得物なのだ。

『あたしは武器だ。使われるためだけに有り、使われなければ無いのと一緒に。というわけで、ロックンロールだ。マイ持ち主』

僕は射手だ。撃つために居て、撃たなければ射手ではない。ならば僕は喜んでその引き金を引こう。マイアームズ。

イメージ通りだ。

病的なまでに繰り返された妄想は、現実のリアリティを凌駕する。撫でるようなトリガープルとほぼ同時に、機関部が最小限で最大限の効率的な躍動を繰る。

落ちる撃鉄は小さな鉄槌、悪漢を屠るシーケンスの始動キー。

飛び出す撃針はある意味最初の弾頭。こいつが弾丸の雷管にブルズアイで命中し、それを知らせるパレードの開幕花火のように炸薬が爆炎、溜まりに溜まった欲求を吐き出すように、凄まじい速度で弾頭が解き放たれる。

螺旋のライフリングに包み込まれながら通過する弾頭は、ジャイロ効果により安定性と飛距離、貫通力、全てのパラメーターを存分に高め、射出される。

そして、生まれて初めて個として外界に放たれた弾頭は、生の悦びを熱狂するように初速を伸ばし、ロン毛男の胸部に突撃した。

着弾の衝撃により石榴のように裂けたホローポイントの弾頭は、男の臓腑を喰い破る。

「—————かッふ」

空気が零れるような、断末魔にしてはか細い声を上げるロン毛男。それはつまり断末魔ではないからだ。必殺の心臓を狙ったのだが、どうやら肺を貫通したらしい。床に打ち倒されたロン毛男は痺れるように痙攣しながら、不自然な呼吸音を漏らしている。

「……え、ちよつと、たつくん？」口をポカンと開けながら、足下で転がる虫の息の片割れを見詰めていた女は、「い、嫌っ！ いやああああアアア！」

走り出した。

僕の方に、ではない。

踵を返して、僕と反対方向に駆け出した。

逃げ出したのだ。しかし、何から？ 僕からに決まっている。

「……………」

その背中を見ながら、僕はゆっくりと銃口を降ろすが、いつでも

構え直せるように両手で保持したまま腰の高さにキープする。

『ファーツ、と言いたところだが、最初にしてはナイスショットだわさ』嬉しそうに硝煙を燻らせているFNP9Mの方から、自称FNP9Mの声がする。『でも、あと一匹残ってるよ。この距離ならまだ殺れる。ほら、早くあたしにあのアバズレの脳漿を撒き散らさせろや』

「…………だ、黙れよ」

力なく呟いて、そうして、僕は動けない。

次第に女の姿が見えなくなって、それと比例して、僕の動悸が速くなる。

撃った。撃った。人を撃ったのだ。人を殺したのだ。

ほとんど無意識的に引き金を引いた僕は、ようやく自分がした事の重大さに気付き。動けない。

男はまだ生きている。しかし、あれでは長くないだろう。肺を撃ち抜かれたのだ。おそらく、持ってあと十分……。

そんな危篤状態に、僕が至らせたのだ。

「げふう。…………ごぷっ、ぐぷプ…………」白目を剥いて、咯血する男。

イメージと違う。

畜生。イメージと違うじゃないか。

妄想の中ではこんな気持ちにならなかった。

どんなに理不尽な殺しをしても、どんなに意味のない殺戮を繰り返しても、

こんなに気持ち悪くはならなかった。

……これが罪悪感というやつなのだろうか。

妄想では殺したその先のことまで、考えたことがなかったからだろうか。

酷く気持ち悪い。

でも、僕に非はない。正当防衛だ。あいつが殺そうとするから、だから殺したんだ。仕方なかったんだ。

……違う。そんなのは詭弁だ。

あの二人は怯えていたじゃないか。僕が銃を見せたとき、明確に恐慌していたじゃないか。撃つ必要はなかった。嚇おどすとか、撃つたとしても急所以外を狙うとか、いくらでも方法はあった。別に殺す必要はなかった。

僕は撃ちたいと思ったんだ。

この銃で、9mmのホローポイントであの男を撃ち殺したいと、切望したんだ。

「はあ、ああ、くそ、畜生っ」

動悸と眩暈が治まらない。

僕はたまらず、壁に片手をつき、ゆっくりとその場に蹲った。

「ごくッ……ゴボッ………ひっ………ひっ………ヒ………」

男の呼吸は浅くなり、それはもはや呼吸停止に近い状態になった。なあってしまった。

やめろ。

聞きたくない。

やめてくれ。

そして、

そして最後に、

ほんの小さな、微かに擦れるような、吹けば飛ぶような細すぎる声だが、僕は聞いた。

男の切望を、辞世の句を、懺悔を、

僕は聞いた。

「………」

男がとうとう事切れてからも、僕は蹲り、震えていた。

男の最後の言葉が、呪詛となって、僕の脳髓をぐるぐると渦巻く。

『ご、めんなさい………すッ、いません………ゆ、ゆる、許して、ください。謝り、ます。だ、から、だから———』

助けてくれよおオ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8861e/>

HolyLance War

2011年11月11日16時37分発行